

# 概念化と言語化

児 玉 徳 美

## 1. はじめに

人はこの世に生をうけ、現実世界に接するなかで現実世界で目に見えるもの、見えないものを多様な範疇に区分していく。世界を範疇化 (categorization) することにより世界が秩序づけられ、世界の中での自らの位置が定められていく。この範疇を心的に特徴づけるものが概念 (concept) である。Lakoff and Johnson (1999:23,38) がいうように、概念は現実世界を映し出すものであるが、人間の肉体・脳が外界と相互作用する過程で形成される。範疇を形成することが1つの概念を形成することであり、逆に概念を形成することが1つの範疇を形成することでもありうる。その点、範疇化と概念化 (conceptualization) は、ものによって発生順序に違いがあるにしても、相互依存関係にあり、結果としては同じものをさす。

概念化により形成された概念を他者に伝えるためには、何らかの記号に移し変える記号化 (symbolization) が必要になる。記号化のうち最も多く用いられるものが概念を言語に移し変える言語化 (verbalization) である。概念のうち言語化され、ことばで表示されるものが意味と呼ばれる。つまり、ことばで表示されるか否かに関係なく、言語的であろうと非言語的であろうと、人の心に形成される範疇が概念であり、言語化 (つまり意味づけ) された概念が意味となる。そこで概念 (化) は言語化される前にどのように形成されるか、あるいは言語化された段階の意味としてどのように機能するかが問われる。

すべての概念が言語化され、ことばに表現されるわけではない。例えば他者に対する態度をジェスチャーで示すこともある。また心に抱くイメージ・感情・感覚などがどのようなものか本人には同定できても、他者に正確に伝える語彙が欠ける場合がある。例えば知人の声を電話で聞いただけで相手が誰であるかわかるが、その声質を説明することはむずかしいし、またすばらしい景色が筆舌に尽くしがたいというとき、話し手はその景色を正確に伝えることばをもたないだけであり、その景色に対して強烈なイメージが欠けているわけではない。

範疇が概念であるとするれば、言語化される前に複数の範疇を結合したり、ある範疇から別の範疇を連想することで新たな範疇や事態を概念化することができる。他方、概念が言語化された段階で意味と同義であるとするれば、概念は語彙に限らず、句・文・言説の意味も概念とみなされる。ただし概念の言語化は概念を語彙に移す語彙化 (lexicalization) において最もうまく対応する。なぜなら言語表現の概念意味を生成解釈する際の心的過程は、語彙を超えて句・文・言説と拡大するにつれて、言語の意味 (構造) の影響を強く受けるためである。人がことばを介して、現実世界で見たり知りえた知見を蓄積し、感情・信念などの思考 (または思いや心的過程) の言語化の基礎には概念化があるにしても、どのように言語化するかは諸言語によって異なり、概念化と言語化は決して同一のものではない。概念化と言語化、概念と意味の間には、その適用範囲のほかに、諸言語間でどのよ

うな異同があるのであろうか。

ことばを駆使できるのは人間の固有の特徴であり、ここには人間に生得的な普遍的な能力と生後の社会経験が関与している。人間に言語表現の普遍性や多様性もこの両面にかかわる。そこで概念化と言語化の関係を明らかにするには、概念化と言語化がそれぞれ人間の生得的な能力と社会経験にどのように由来するかを明らかにする必要がある。本論の目的は概念化や言語化がどのように形成されるか、両者の関係が諸言語においてどのように実現されているかを考察し、言語分析の今後のあり方を探ることである。

## 2. 概念化

概念の形成には人間が本来もっている概念化能力 (conceptualizing capacity) と実際に生後に習得する概念体系 (conceptual system) が関与している。概念化能力とは現実世界や事態に接し、社会における経験を多様に解釈しうる人間の普遍的な能力であり、生得的な認知能力でもある。他方、概念体系とは言語表現・フレーム・価値観・推論過程などにおいて無意識的にいだかれる一連の概念の枠組みである。Lakoff (1987:310) が主張するように、概念化能力と概念体系は区別する必要がある。両者を区別してはじめて人間の言動の普遍性と多様性を説明することができるためである。

概念化能力が普遍的・生得的であるからといって、すべての人間が常に同じ概念体系をもつわけではない。普遍的で生得的な能力も生後に活用しなければ枯渇していく。例えば英語で *r* と *l* が *grass* (草) と *glass* (ガラス)、*rice* (米) と *lice* (シラミ)、*right* (正しい、右) と *light* (光) など異なる価値をもち区別されるが、日本語のラ行ではどちらを用いても違いがないため、日本語話者は *r* と *l* を区別する能力を失っていく。こうした違いが英語と日本語の音韻体系に違いをもたらしている。同じように概念体系も生後の経験により外的世界のどこに焦点を当てるかが違ってくる。例えば日本語は英語に比べて対象依存性が強く、相手が誰であるか、対象が何であるかによって表現が異なる。これは日本語の豊富な自称詞・対称詞や敬語に限らない。英語の指示語が *this—that*, *here—there* の二分法であるのに対して、日本語は「コ・ソ・ア」の三分法をとり、英語なら *give* ですむところを日本語では話し手と *give* の主語・間接目的語との関係に応じて「やる」「くれる」と区別したりする。言語表現で対象依存性が強いということは、状況への配慮が厚く、非言語的な行動においてもコンテキスト依存性が高いこととつながる。ここでは既知の情報や関係を互いに暗黙の了解事項とし、あいさつ・つき合い・契約などの対人関係において「ウチ」と「ソト」が区別される。その結果、概念体系の違いが思考様式や言動様式にも影響を与える場合がある。

人が生まれつきもっている普遍的な概念化能力と生後の経験によって多様に分かれる概念体系の関係が問題になる。両者の一方が普遍的で他方が多様性に富むという単純なものではない。概念化能力の中には不変でどの概念体系にも存在するものや、逆に活用しなければ消えていくものもある。また経験の違いが概念体系の違いに直結するものでもない。重要なことは、一方で概念化能力のうちどのような要素が生後の経験を越えて生き残るのか、他方で生後の経験において言語を含む社会文化状況のどのような要素が概念体系の違いをもたらすのかを明らかにすることである (概念化能力と概念体系の関係について詳しくは兎玉 1998:106-109 参照)。

概念化能力が世界や事態を多様に解釈しうる認知能力であり、概念体系が言語共同体内で経験に

基づく慣行として形成されるとすれば、言語と認知プロセスには密接な関係がある。例えば英語話者が指示語において英語に存在しない日本語の三分法を理解したり、文化様式において Benedict (1946) のように、一見対立するかにみえる「菊」と「刀」がなぜ融合しているのかを理解しようとすることも、概念化能力を介して異なる概念体系を会得しようとする認知プロセスである。人間が他の動物と違って言語を駆使する生得的能力をもつことに疑問はない。問題はこの生得的能力が言語に固有のものか他の一般的な認知能力の反映や派生によるものかという点にある。今日いずれとも決定的な証拠が見出されず、言語と認知の関係についてはさまざまな主張が生まれている。

心理学者の J.Piaget は 20 世紀に長年にわたって認知発達と言語発達との関係を考察し、認知優先説を展開した。そこでは認知概念の発達が言語発達の前提条件であるとした。また人類学者の Whorf (1957) は Sapir (1921) の考えを引き継ぎ、言語優先説（または言語相対論）を推し進めた。そこでは言語がどのような意味範疇をもつかによって世界の区切り方が異なり、世界観の違いにもつながると主張した。その後言語学では生成文法が言語能力のモジュール性を強調するなかで言語能力の生得論を主張している。最も徹底した生得論者である Fodor (1981:315) は概念意味が経験に先立って人間に埋め込まれており、語の意味は定義不可能であると主張している。ところが、その後生まれた認知言語学は言語能力が他の認知プロセスから独立したモジュールをなすものとして捉えず、現実世界の経験から創発する概念が言語の意味であると捉えている。児玉 (2008:16) は認知言語学を概念優先説と呼んだが、認知と言語（または概念と意味）不可分説と呼ぶほうが正確であろう。

現在、生成文法は言語知識が一般的な認知能力から独立した自立的なモジュールとして成り立っているとみなし、言語を構成する文法操作や原理群を徹底して因子分解している。そこでは生得的な言語能力の単位を最小化するため、語や文を生成派生する基本単位として抽象的な素性 (feature) を設定しており、還元論的である。他方、認知言語学は、言語能力を人間の五感・運動感覚・イメージ形成の拡大・範疇化・視点の投影などのかかわる一般的な認知能力であると捉え、言語知識はこのような身体的な動機づけに支えられ、現実の経験を通して習得されるとみている。言語知識を一般的な認知プロセスの反映とみなす点で全体論的である。認知言語学は概念(化)を言語の意味と同義とみなし、言語知識と非言語知識の区別立てもしない。例えば April や shortstop の意味はカレンダーや野球の知識があつてはじめて理解可能である。ある語の意味を知るということは、単に言語体系内の意味にとどまらない。百科事典的知識としてその意味が用いられる領域を構成する概念複合体の全階層もかかわってくる (Langacker1990:4 参照)。また認知言語学は言語構造においても語彙部門・形態論・統語論が境界のない一体のものであり、記号を構成する形式と意味を不可分のものとしている。そのため意味論と独立した統語論が存在するわけではなく、形式やその構造的側面を分析する文法（または統語論）の自立性もありえない (Langacker2001:1 参照)。ここでは言語の分析理論のあり方が関係してくる。

生成文法は認知科学の 1 つとして 20 世紀後半に生まれ、広義には言語能力も認知能力の一部となるが、言語能力がモジュールをなすとみなすため、言語と認知一般の関係を正面から考察することはしない。意味が言語学の中心テーマとして考察されるようになったのは 1970 年前後からである。意味の分析をしようとするれば、言語化される前の概念も問題とせざるをえなくなり、当然、言語と認知の関係が問われることになる。1980 年代より両者の関係を正面から捉えようとしてきた認知言語学の功績は大きい。もちろんすべての意味論が認知言語学のように概念と意味を不可分とみなしているわけではなく、それぞれ分析法も違っている。

生成文法の意味分析は、1960年代に意味素性が導入されて以後、語彙を意味素性に分解していった。1970年前後に展開された生成意味論は例えば kill (x,y) を x CAUSE ( BECOME ( NOT ( y ALIVE ))) と分解した。語彙分解の流れはその後も続いている。

(1) a. 統語構造

[<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> John] [<sub>VP</sub> ran [<sub>PP</sub> into [<sub>NP</sub> the room]]]]

b. 概念構造

[<sub>Event</sub> GO ( [<sub>Thing</sub> JOHN], [<sub>Path</sub> TO ( [<sub>Place</sub> IN ( [<sub>Thing</sub> ROOM) ] ) ] ) ] ]

(2) クオリア構造

a. 構成：事物の構成部分で事物の材料・重さ・部分など

b. 形式：事物をより大きい領域から特徴づけるもので物体としての大きさ・形状・色彩・位置など

c. 目的：活動にかかわる事物の目的や機能など

d. 製造元：事物の製造・発生にかかわる製作者・自然・因果関係など

(3) a. Mary painted the door.

b. Mary walked through the door.

(4) a. Mary enjoyed the movie last night. (watching)

b. John quite enjoys his morning coffee. (drinking)

c. Bill enjoyed Steven King's last book. (reading)

(1a,b) は概念意味論 (conceptual semantics) を展開している Jackendoff (1990: 45) による。(1a) の統語構造は (1b) の概念構造に対応し、(1b) は文の主要部である動詞 go の語彙概念構造が項やその修飾語とどのように結合して文を形成するかを示している。(1a) の主語は (1b) での GO の第 1 項、前置詞句は第 2 項に対応し、前置詞 into は経路の TO と場所の IN の複合概念に分解される。

(2)-(4) は生成語彙意味論 (generative lexicon) を展開している Pustejovsky (1995:85-91) による。Pustejovsky は (2) で示した 4 種の役割が語彙項目のクオリア構造 (qualia structure) を構成して意味解釈に寄与しているという。クオリア構造の役割は事物が本来的に備えている固有の性質を示すものである。(3a,b) の door は多義で物体としての「ドア」と通用口としての「ドア」を示すが、この多義性は名詞 door の役割のうち建物を構成する物体 (2b) か物体の構成部分 (2a) のいずれのクオリアに焦点を当てるかによって生まれたものである。(4) の動詞 enjoy には多様な楽しみ方があり、ことばに明示されていないが、目的語の名詞との関係で各文の末尾に示した ( ) 内の活動と関係している。このデフォルト解釈は各文の目的語の目的役割 (2c) から可能になる。

語彙概念は原素概念や複合概念からなる。複合概念とは原素概念から派生したり原素概念が結合したものである。語彙分解論者はほとんどの語彙項目が triangle, bachelor, Chicago なども含め複合概念からなり、経験により学習されると考えている。しかし生成文法の流れを汲むものがすべて語彙分解をしているわけではない。先ほど最も徹底した生得論者であると述べた Fodor (1981:279) はほとんどの語彙概念が経験に先立って生得的に人間の脳に埋め込まれているため内部構造をもたないか、もったにしても語彙習得の上で何の役割もはたさないと主張している。

確かに I や he を定義したり、walk と run の違いを厳密に区別しようとしても困難を伴う。そうかといって、日常の言語活動で混乱が生じるわけでもない。ここではそれぞれの語の意味が全体的に把握され、個別の原素概念に分割されているわけではない。しかし次例のような違いを説明す

るためには、原素概念と複合概念の区別が必要になる。

(5) a. bachelor vs 独身男性

b. ?\*The Pope [Tarzan] is a bachelor. vs ローマ教皇 [ターザン] は独身男性である。

(5a) において日本語の「独身男性」は原素概念の [UNMARRIED] と [MAN] が結合したものとみなされるが、英語の bachelor はその複合概念だけでなく、正確には「結婚適齢期で結婚の意志をもつこと」が含意されている。その違いが (5b) において日英語の適格性に違いをもたらしている。

生成文法での意味分析は内部で違いをもちながらも、言語理論の厳密化をめざしている。そこでは一般に言語の形式面にかかわる統語論の自立性を認め、言語表現の意味を抽象的な素性に分解し、分解・合成の解釈 (interpretation) を明らかにしようとしている。これに対して、認知言語学は現実世界をどのように捉えて言語表現するか、その捉え方 (construal or cognition) を中心課題としている。その際、しばしば具体的な空間上の位置や移動の知覚を基礎にし、その概念を時間・状態などの抽象的な概念に転用している。ここでは統語論の自立性を否定し、理論の厳密化ではなく、むしろイメージや比喩を介して概念の認知プロセスを明らかにしようとしている。

これまで言語分析はできるだけ厳密な形式化や客観化を進めるために、連続体をなすノン・ディスクリット (連続的) な現象を不連続なディスクリット化した用語を用いて説明してきた。素性が導入されたのもその一環である。例えば英語の母音 [i] や uncle は次のような素性に分解される。

(6) a. [i]: -CONSONANTAL, +VOCALIC, +HIGH, +FRONT, +ROUND

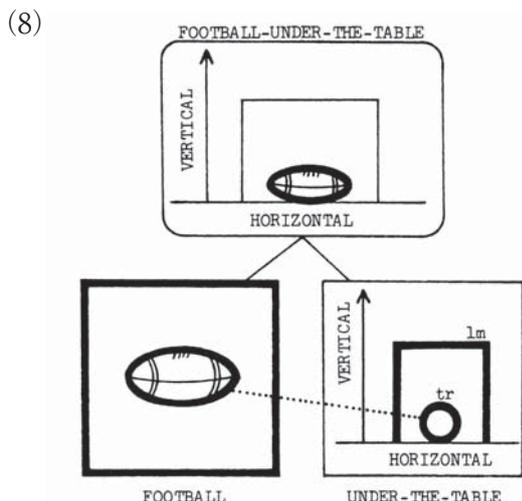
b. uncle: MALE, COLLATERAL, ASCENDING GENERATION

Langacker (1987:19-20) によると、認知言語学は素性分析の有用性を完全に否定するわけではない。しかし複合的な構造体を完全に記述するためには、素性分析は、その構造体に見合う、より全体論的 (holistic) な分析によって補完されなければならないという。そこでは (6a) には声帯の振動・舌や唇の位置などが融合し、(6b) では自分・縁者・uncle で示される人の三者の関係や兄弟・子供の関係などもからむ。しかしこれだけなら uncle と nephew の区別もできないため uncle の概念意味には血縁関係の全体像を知る必要があるという。

素性分析の限界を指摘する点で認知意味論は Fodor (1981) と似ているが、Fodor の語彙概念が経験に先立って人間に埋め込まれているのに対して、認知意味論では経験を介して概念が形成される点、両者は大きく異なる。認知意味論での概念意味は客観的現実にあるわけではなく、言語主体者の認知プロセスの中で形成されることになる。

人が現実を見ると、すべての物を対等の姿で捉えるわけではない。認知プロセスにおいては salience または prominence とよばれる「顕著さ」または「際立ち」の違いに応じて認知の仕方が異なり、表現の仕方が異なることになる。現実の事物は顕著さの違いに応じて焦点を当てられるものとそれを支えるものに分かれ、トラジェクター (trajector) とランドマーク (landmark)、プロフィールとベース、図 (figure) と地 (ground) に区分されたりする。ここでは Langacker (1987:289) に従い、認知プロセスがどのように記述されるかを 1 例のみ示す。

(7) that football under the table



(8) はイメージスキーマを用いて (7) を記述したものである。図式の上部は空間上、水平上に広がる [FOOTBALL] と垂直に伸びる [UNDER-THE-TABLE] の複合構造であり、二段目は FOOTBALL が名詞表現のプロファイルであり、位置関係としてはランドマークである UNDER-THE-TABLE のトラジェクターであることを示している。

概念形成を重視し、それを軸に言語を分析する点で認知意味論は生成意味論に似ている。しかし生成意味論が深層構造としての意味表示を記述の出発点とし、変形操作を繰り返して表像構造を生成することで統語論と意味論の統合を図ったが、認知意味論には深層構造や変形操作はなく、認知プロセスの証拠は (8) のように直接言語表現に求められる。その点、両者は認知プロセスや概念形成において大きく異なる。

### 3. 言語化

記号は形式と意味が結合したものである。形式は音声または映像で表され、記号化された概念が意味と呼ばれる。形式や意味はすべて均一なものではなく、記号に応じて複雑さが異なる。

(9) a. りんご (実物) ⊃ リンゴ (記号形式) vs リンゴ (記号形式) ⊃ りんご (実物)

b.  $1 + 2 \supset 3$  vs  $3 \supset 1 + 2$

c.  $A + \text{Verb} + B + C \supset$  i) A が B に C を移動する vs i)  $\supset A + \text{Verb} + B + C$

ii) A から B に C を移動する、

または A に B から C を

移動する

vs ii)  $\supset A + \text{Verb} + B + C$

「p ならば q」と「q ならば p」の両方が正しければ対称性または双方向性が成立する。服部・山崎 (2008) によると、(9a) において「りんご」(実物) の刺激に対して「リンゴ」という記号形式を選ぶことができる段階で、その逆に「リンゴ」という刺激に対して実物の「りんご」を選択すれば対称性が成立するが、人以外の動物では対称性がほとんど成立しない。つまり動物は (9a) で vs の前半ができた段階でも、vs の後の「リンゴ」という記号形式の刺激に対して「りんご」を選択することができない。ここには「リンゴ」が絵などの記号と異なり言語記号の特徴をもつため、生得的に言語能力をもつか否かが関与していると考えられる。(9b) ではたとえ人でも、3・4 歳の幼児には対

称性が成立しにくい。動物ではなおさらである。ここでは数字がどのようなものであるのかという、より抽象的な意味の理解が要請され、vsの後半では単なる加算でなく3を構成する部分の理解が必要となる。対称性の問題は単一の記号レベルにとどまらない。(9c)の構文レベルでも双方向的推論が働いている。(9c)はA・B・Cが名詞を表し、動詞の後に2つの名詞を伴う二重目的語構文である。母語を自由に駆使する英語話者はi)を、中国語話者はii)を習得している。i)においてBは着点を示し、ii)においてAまたはBのいずれかがそれぞれ移動するCの起点と着点を示す。i)では起点が必須でないが、ii)では起点と着点の両方が必須である。(9c)は諸言語により言語化の内容が異なることを示している。ここでは記号化において意味が形式を誘発するだけでなく、形式が意味を誘発している。Goldberg (1995)の提唱する構文文法もこの点に着目したものである。二重目的語構文の諸言語の違いについて詳しくは次節で考察する。

複雑な記号の理解には形式と意味を結びつけるために推論が働いている。双方向的推論は広義の因果関係に及ぶ場合もある。例えばりんごが木から落ちるのは自然法則の万有引力が働いているためといえる。しかし因果関係では必ずしも常に対称性が求められるわけではない。なぜなら(9c)の英語型から示唆されるように、人はしばしば非対称的に原因(または起点)より結果(または着点)を重視するためである。つまり原因が不明でも結果がわかれば落ち着くことが多い。また原因から唯一的に結果が導かれない場合があるためである。このような留保条件はあるが、記号の生成理解には記号の形式と意味、さらには現実世界の知識などを結びつける推論過程においてしばしば双方向性が大きな役割をはたしている。

言語化において意味と形式は表裏一体をなして切り離しがたいが、両者の結びつきは恣意的であるとするSaussure (1916)の古典的な主張は言語の一面を語っている。例えば日本語で「犬」を「ネコ」と呼ばなければならない必然性はない。個人的に「ネコ」と呼んでもかまわないが、それでは現実に日本語社会の「約束事」に違反し、ことばとして通用しない。重要なことは言語共同体において「約束事」として定着することであり、「約束事」として定まれば、どのような呼称もことばとして機能することになる。本来、形式と意味は互いに独立したものであり、必ずしも1対1で結合するわけでもない。意味は話し手の指示・意図・思考・感情などを伝えるもので無限に存在するが、それを有限の形式で表現しようとするため、諸言語で範疇化や言語化が異なるのも不思議でない。

しかし形式と意味の恣意性は言語の一面にすぎず、それを強調することは言語の全体像をまちがえることにもなる。形式と意味の間には多くの有縁性がある。そこには大きく2つの理由がある。Tesnière (1959:42)が指摘するように、形式の目的は意図や思考などの意味の表現を可能にすることにはほかならないためである。例えば、teachの意味は恣意的であるが、-erをつけたteacherは「教える人」の意味として決して恣意的ではない。形式が意味を有縁的に結合させているのはこのような接辞に限らない。(9c)で指摘した構文や語順なども意味を示唆している。第2の理由は言語化を可能にしている認知プロセスにある。そのことは動植鉱物の種類を表す名詞や知覚・運動を表す動詞が諸言語でほぼ同じような範疇に言語化されていることからもうかがえる。言語を駆使できるということ自体が人間の生得的な能力にかかわり、言語化にはその能力に固有の生得的な言語構造が存在することにもなる。例えば動詞と主語・目的語の語順は言語によって異なるが、目的語より主語のほうが強い焦点をうけ、通常の語順で100%近い言語において主語が目的語に前置している。また名詞の数が単数か複数か、動詞の時制が過去か現在かを文法上区別する言語が多数あるが、事物の色彩を示す形態素が名詞についたり出来事が生じたのが昼か夜かの違いを示す標識が動詞につく

言語はまったく存在しない。人間が世界に接するなかで、複数の参加者の何に焦点を当てるか、同じ範疇の成員で何を典型的なものとするか、全体と部分・因果関係などを含む事態をどのように把握するかなどの認知プロセスは、多くの共通性を有し言語化に反映している。

問題は言語分析において形式と意味をどのように扱うかである。どの言語理論も形式と意味の結合関係や有縁性を探っているが、その手法は分かれている。これまでにみたように、理論によって言語の形式とその構造を扱う統語論が自立的で、意味論は形式や構造を解釈するものとみなしたり、逆に意味から出発して形式を導いたり、あるいは意味と形式は不可分に融合したものとするものがある。これ以上詳述しないが、重要なことは、形式と意味の有縁性を明らかにすることにより、いかに言語の全体像に迫るかである。

無限ともいえる概念が有限のことばに表現されるとしたら、言語化された意味も無限にあるといえる。言語化された意味は文脈の中でどのように解釈されるのであろうか。

(10) Pablo's painting is of a crying woman.

(11) Peter: Would you drive a Mercedes?

Mary: I wouldn't drive ANY expensive car. (Sperber and Wilson:1986:194-197)

(12) a. He handed her the scalpel. [A SECOND OR TWO LATER] She made the incision [WITH THAT SCALPEL].

b. The car is too expensive [FOR ME TO BUY].

c. I have had lunch [TODAY]. (Sequeriros: 2002)

(10) の Pablo's painting はそれだけとれば「パブロウの所有する絵」「パブロウが描いた絵」「パブロウを描いた絵」を意味するが、(10) の文脈では通例「パブロウ・ピカソが描いた絵」と解釈される。(11) の Mary は Peter の質問に直接 I wouldn't drive a Mercedes. と答えていないが、「ベンツには乗らない」という意味が推論される。(12) の [ ] 内の大文字部分は実際に発話されていないが、通例発話部分を補い富化する (enrich) ものと解釈され、関連性理論では表意の一部とみなされる。(10)-(12) では文内の語句の合成的意味だけでなく、明示されていない社会文化上の知識や話し手の意図などがデフォルト解釈されている。

言語表現には次のような意味が埋め込まれている (詳しくは兎玉 (準備中) 参照)。

(13) a. 言内の語・句・文・言説により指示される意味

b. 言外の意味

i) 臨場的コンテクストに由来するもの: 発話の場面・場所・時間、対話者の関係、場面の雰囲気、話題など

ii) 半恒常的コンテクストに由来するもの: 話し手の年齢・出身地・教育・地位、世界についての知識、価値観、信念体系、社会状況など

c. 話し手・聞き手の意図や主張

語りたくないこと語りたくないこと・聞きたいこと聞きたくないこと、意識的に語ること・聞くことを避ける不作為の「行為」など

d. 上記 (a)-(c) の意味を推論や論理操作などにより統合させる演算過程

言語表現には多様な情報が埋め込まれており、その意味を解釈するには、単に表現の意味を構成する要素に還元して各要素の意味を加算するだけでは十分ではない。そのことは (10)-(12) からもうかがえる。(13a-d) を介してゲシュタルト的に全体の意味を探ることにより部分を再解釈する場合も

でてくる。ここには (6a,b) の解釈におけると同様に、ボトムアップ式の還元論とトップダウン式の全体論を統合することが必要になる (詳しくは兎玉 2008:178 参照)。言語理論や意味分析の妥当性は (13a-d) の意味をどれほど扱うかによって評価される。20 世紀末より展開されている意味分析は (13) の評価基準に対してどう応えているのであろうか。

生成文法の流れを汲む Jackendoff の語彙概念意味論や Pustejovsky の生成語彙意味論は (1)-(4) からうかがえるように、語彙項目の意味を加算したものを意味としている。他方、認知意味論は (8) からうかがえるように、イメージスキーマを通して事態を解釈している。その手法は異なるが、両者に共通していることは、世界についての概念や認知プロセスを意味と同じものとみなし、主に文内の意味を扱い、文を超える言説の意味を扱っていない点である。その結果、(13a) での言説が分析の対象外となり、(13bii) での価値観・信念体系・社会状況や (13c) での話し手・聞き手の意図・主張の分析が弱く、その意味を分析する視点を放棄しているとさえ考えられる。

今日の意味分析がこうした状況に至っている原因は、第 1 に、概念 (化) が意味のすべてであると錯覚しているところにある。言語化された言語表現の意味は 1 つの文または隣接する 2・3 の文で完結するものではない。(13bii) や (13c,d) を介して言説全体の意味を理解してはじめて言語による情報伝達が完成する。第 2 の原因は、文内の言語形式や言語構造を扱う文法と言説分析の間には断絶があり、文内の意味と言説の解釈は別物と考え、言説を分析対象としないところにある。こうした考えは生成文法や認知意味論に限らない。Blakemore (2001) が指摘しているように、発話理解の方法を探っている関連性理論においても同様である。こうした文中心の意味分析、あるいはせいぜい隣接する 2・3 の文を対象とする語用論は、文を最大の分析対象とする統語論の強い影響をうけた結果でもある。

概念の言語化という場合、言語化は概念の語彙化 (lexicalization) のみをさすわけではない。概念を具現した語と語が連なる語の連鎖も含んでいる。言語化された言語表現においては語より文、文より言説と数多く語を連ねるにつれて、人間の思考過程は概念のネットワークというよりも、むしろ言語表現の意味やそこから示唆される言外の意味に基づいている。(10)-(12) でみたように、言語表現には (13) の多様な意味が込められている。例えば 1 語だけとりあげると、多義化の結果、その語義は多様に分かれ、あいまいであるが、語が他の語と共起することにより語義が限定され、徐々に語句の意味が明確になる。つまり語彙化の段階では 1 語に多様な概念意味が存在することが意識されるにしても、語連鎖では言語表現が主役になり、語句の意味が特化されたり、言外の意味が付加されてくる。

(14) a. John hit the wall. (ジョンが壁をぶった/ジョンが壁にぶかった)

b. John deliberately hit the wall. (ジョンがわざと壁をぶった)

vs John accidentally hit the wall. (ジョンが偶然壁にぶかった)

(15) a. I moved from Earl's Court to Ealing. The rent was less expensive.

b. I moved from Earl's Court to Ealing. The rent was too expensive. (Matsui 1993)

(14a) の文は 2 通りにあいまいであるが、(14b) にみるように副詞がつくとそれぞれ一義になる。(15) だけの文から判断すると、the rent は (15a) では Ealing と、(15b) では Earl's Court と結びつく可能性が社会的に大きい、その後の文の展開によってはその逆の解釈も可能である。

語数を多く用いて言語表現を長くすることが、必ずしも常に意味解釈を明示的にするわけではない。

(16) a. 踊子はやはり唇をきっと閉じたまま一方を見つめていた。わたしが縄梯子に捉まろうとして振り返ったとき、さよならを言おうとしたが、それも止して、もう一遍うなずいて見せた。

b. When I grabbed the rope ladder and looked back, she tried to say good-bye but gave up and merely nodded one last time. (J.M.Holman)

c. As I started up the rope ladder to the ship I looked back. I wanted to say good-bye, but I only nodded again. (E.Seidensticker)

(16) は中野 (2002:96-97) で論じられているものである。(16a) は川端康成『伊豆の踊子』の一節であり、(16b,c) は (16a) の 2 番目の文の翻訳である。(16a) の下線部の日本語では主語が省略されているが、それに対応する英語は (16b,c) で主語が異なっている。言説ではこうした主語のデフォルト解釈に限らず、価値観や信念体系のデフォルト解釈が人によって異なることがある。

(17) a. [これまでの議論で] とても心配なのは、分析や反省が不在なことです。たとえば「テロリスト」という言葉をとってみましょう。この語は、いまや、反米主義と同一視されています。そして今度は、反米主義と合衆国に批判的であるということが同義とされ、ひいては合衆国に批判的であることは愛国心に欠けるということに等しいとされるのです。こんなむちゃな等式の連続は、とても受け入れられません。テロリズムの定義はもっと正確でなければなりません。そうしなければ、たとえばイスラエルの軍事占領と戦うためにパレスチナ人がしていること、世界貿易センターをつぶしたようなテロとを区別することができなくなってしまいます。(Said (2001, 中野・星野訳 :94))

b. [イスラム世界において] わたしたちの中の何人が、自爆作戦はすべて不道徳であり間違っていると非難したであろうか。…無差別な殺戮をいとわぬような人々の戦闘行為 (狂気の沙汰である) を容認したり支持したりするようなことがあってはならない。この点においては、これ以上曖昧さを許す余地はいささかもない。(同上 : 34)

(17a,b) は一人のアラブ人として、またニュー Yorker としての Said の発言である。(17a) では利害を共有するアメリカとイスラエルがアラブの正当な抵抗をもテロと呼ぶことを批判しながらも、(17b) ではイスラム教徒による無謀な自爆テロに対してはアラブ人自ら反対の声をあげるべきであまいな態度は許されないという。(17a,b) の解釈はアラブ人とアメリカ人、あるいはそれ以外の人の間で必ずしも一様でない。その意見に賛同するか否かを問われると、その違いはさらに拡大すると予想される。価値観や信念体系での解釈の違いは、後ほど §5 でみるように、何を語り何を語らないか、何を聞き何を聞かないかともかかわる。

意味のあいまいさは文と言説で質的に異なるものではない。意味解釈の対象範囲が狭いか広いか、(13a-d) の解釈基準の数が多いか少ないかの違いにすぎない。対象範囲が狭ければ意味は明示的であり、広くなれば新たな選択肢がふえ、柔軟性に富み、意味解釈に新たなあいまいさが生まれることもある。このあいまいさは (13a-d) の意味そのもののあいまいさによるわけではない。(13a-d) のいずれを基準に解釈するかのあいまいさにすぎない。意味解釈において文内・文間・言説の間に基本的な違いはない。意味分析が分析対象を狭く限定することは言語活動の全体像から遠ざかることになる。

#### 4. 言語化規則の非対称性：二重目的語構文を例に

無限ともいえる概念を有限の形式で表現するため、言語化された意味と形式との間に1対1の対応関係を期待することはできない。言語化において形式は恣意的に意味と結合し、両者は本来独立したもので、言語という全体の異なる部分を構成する。しかし形式は意味を表現するために存在し、そこには両者を結びつけるために多くの規則や原則が働いている。その結果、形式と意味の結合には一貫した関係とともに、しばしば不整合またはミスマッチやズレと呼ばれる非対称性が生じることになる。

前節の冒頭の(9)では認識において特定の記号形式と実物または意味との間での(非)対称性をみたが、本節は規則における形式と意味の結合のあり方、つまり規則や原理の適用の仕方での非対称性を考察する。非対称性は同一言語内においても諸言語間においても生じる。本節は文内の言語化を対象とし、次節は主に言説内の言語化を対象に何を語り何を語らないか、また何を聞き何を聞かないかを対比して話し手・聞き手の意図を考察する。

(18) a. drive a nail (くぎを打ち込む), drive a golf ball (ゴルフの球を打つ) vs drive a car (車を運転する)

b. go to school vs go to (the) market vs go to \* (the) shop

(19) a. practice vs 実行(する)、慣行、業務、開業(する)、練習(する)

b.i) 平叙文

He's coming toward us. vs こっちへ来ている。(陳述) / こっちへ来るよ。(予告) / こっちへ来るぞ。(警告) / こっちへ来るね。(確認)

ii) 疑問文

Is he honest? vs 彼は正直者ですか。(質問) / はたして彼は正直者か。(自問) / やつは正直なものか。(修辭疑問)

iii) 命令文

Wait a moment. vs ちょっと待て。(命令) / ちょっと待ってよ。(依頼) / ちょっと待っては。(提案)

c. SVO vs SOV vs VSO, 主要語前置言語 vs 主要語後置言語、動詞フレーム言語 vs 衛星フレーム言語、階層言語 vs 非階層言語、題目言語 vs 非題目言語、文法関係の性・数・格・比較・時制・態・法などの表示法

(18a,b) は同一言語内、(19a-c) は異言語間の非対称性の例である。(18a) において vs の前半の2つの句に現れる drive が意味上関連していることには誰もが一致するが、Langacker (1987:15) も疑問を呈しているように、vs の後半の drive の意味はどのようにして生まれたのであろうか。(18b) の名詞はそれぞれその本来の役割をはたす場所を示しているが、定冠詞 the のつき方が名詞によって異なる。the を省略したり、the をつけてもつけなくてもよいものや常に the をつけるものに分かれる。この違いは何によるのであろうか。(19a) の英語の practice は日本語では文脈によって多様に表現を変える必要がある。単に語義の問題でなく、英語では品詞も名詞と動詞の両方にかかわる。日英語では語義や品詞の拡大に異なる原理が働いている。(19b) は話し手の意図を表す言語化が文の種類により日英語で異なることを示している。文の種類は形式上限られており、多くの言語で通例平叙文・疑問文・命令文に分類される。各文は話し手の多様な意図を表し、(19b) の日本語末尾

の（ ）内はその一部である。一般に話し手の意図は英語では (19a) と同じく文脈に応じて推論されるのに対して、日本語では下線部によって明示される。(19c) は諸言語間にみられる言語類型の例である。それぞれの類型に属する言語グループは系統的にも地域的にも入り乱れており、諸類型の間、あるいは類型と言語構造間の関係を一律に論ずることができない。この例を含め、これまで論じられている言語類型はすべて文を最大の分析単位として考察されたもので文構造の類型にすぎない。分析対象を言説の構造にまで拡大した場合、諸言語間にはより多くの共通性がみられるはずである(詳しくは兎玉 2008:87-90 参照)。

(18a) (19a,b) は主として語義の拡大や話し手の意図の言語化に、(18b) (19c) 統語形式にかかわるが、ここにはどのような規則・原理が働いているのであろうか。語義・意図の言語化や語順・統語形式の類型化についての一般的考察は別の機会にゆずり、本節は二重目的語構文を具体例として主に諸言語間の非対称性を考察する。語義拡大や言語類型の一般的考察を行なう前段階でもある。

英語・日本語・中国語の二重目的語構文を比較する。二重目的語構文は動詞が目的語に2つの名詞を伴うものである。孤立語の性格をもつ英語と中国語は名詞に何の語尾接辞や接置詞(つまり前置詞や後置詞)もつかずに2つの名詞が動詞に後置して [V NP<sub>1</sub> NP<sub>2</sub>] の語順をとる。これに対して日本語は [NP は/が NP<sub>1</sub> に NP<sub>2</sub> を] と NP<sub>1</sub>, NP<sub>2</sub> につく後置詞(つまり助詞)が格フレームを示すが、時に「太郎が花子(に)本(を)やった」のように( )内の後置詞が欠けても、ほぼ同義となる。そこで日本語の NP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub> も英語や中国語に準じて便宜的にそれぞれ間接目的語、直接目的語と呼ぶことにする。

次例を参照されたい。

(20) a. John gave Mary a book.

b. 太郎が 花子に 本を やった。

c. 老張 給了 老李 一本 書。

give ASP one CL book

(20) の授与動詞において3言語は類似の構造を示し、それぞれ NP<sub>2</sub> の「本」が NP<sub>1</sub> に移動している。NP<sub>1</sub> が移動の「着点」であり、NP<sub>2</sub> が移動の「対象」である。ところが次例では事情が異なる。

(21) a. John bought Mary a pen.

b. 太郎が 花子に ペンを 買ってやった。

c. 老張 買了 小呉 一枝 筆。

buy ASP one CL pen

'John bought a pen from Mary.'

cf. d. 老張 買給了 小呉 一枝 筆。

(22) a. John knitted me a pair of gloves.

b. 太郎が 私に 手袋を 編んでくれた。

c. \*老張 織了 我 一双 手套。

knit ASP me one CL gloves

cf. d. 老張 給我 織了 一双 手套。

(23) a. \*John ate me an apple.

b. \*太郎が 私に リンゴを 食べた。

c. 老張 吃了 我 一介 苹果。

eat ASP me one CL apple

'John ate my apple.'

(24) a. i) John lent Mary a book.

ii) \*John borrowed Mary a book.

b. i) 太郎が 花子に 本を 貸した。

ii) 太郎が 花子に 本を 借りた。

c. 老張 借 老李 一本 書。

lend/borrow one CL book

i) John lent Mary a book. or ii) Mary lent John a book.  $\equiv$  John borrowed a book from Mary.'

(21a,b) はともに NP<sub>1</sub> が着点になるが、(21c) の中国語では起点となる。英語や日本語では (20) と同じ授与動詞であるのに対して、中国語は取得動詞であり、これに類する動詞には偷 (rob)、収 (receive) などがある。中国語に対応す意味を表そうとすると、英語や日本語では二重目的語構文が不可能になる。(22a,b) の製造動詞の場合、英語や日本語では NP<sub>1</sub> が着点になるが、(22c) の中国語では二重目的語構文が不適格となる。(20)-(22) の違いは何によるのであろうか。英語や日本語では事物の移動にかかわる動詞には着点が不可欠であるが、(21) (22) のように起点はなくてもよい。これに対して中国語では移動にかかわる動詞には起点と着点の両方が必要である。(20c) は日英語と共通するが、(21c) では NP<sub>1</sub> を起点、主語を着点とみなすことで日英語と異なる意味になる。日英語と同じ意味の二重目的語構文とするには、(21d) のように「買」と「給」(give) の複合動詞「買給」(買ってやる) にする必要がある。(22c) の構文では起点がどこにも存在しないため二重目的語構文は不適格になる。日英語の意味を表すためには、(22d) のように、着点を明示する前置詞句「給我」(私のために) (「給」は動詞に由来する前置詞) を用い、「織」は単一の目的語をとることになる。(23a,b) の日英語は NP<sub>1</sub> に着点を付与できないため不適格であるが、中国語は取得動詞として NP<sub>1</sub> に起点、主語に着点を付与できるため適格になる。(24c) の「借」は主語と NP<sub>1</sub> のいずれに起点・着点を付与するかにより 2 通りの解釈が可能であるが、日英語では i) と ii) の意味に異なる動詞を用いる。「借」が i) の lend の意味の場合、(20) と同じ授与動詞として日英語とも可能であるが、ii) の borrow の意味の場合、取得動詞として日英語で適格性が異なる。英語は二重目的語構文が不可能であるが、日本語は中国語に似て可能である。

(20)-(24) において英語と日本語は (24a,b) の ii) を除いてほぼ同じふるまいをする。一般に英語や日本語は移動を拡大解釈して無から有の状態へ NP<sub>2</sub> を「出現」させる (21) や (22) も一種の移動とみなしているが、逆に有から無の状態へ「消失」させる (23) は不適格になる。もし「出現」と「消失」が対照的であれば (21) (22) の NP<sub>1</sub> を着点とみなしたように (23) の NP<sub>1</sub> を起点とみなすことができるはずであるが、現実には不可能である。ここでも出現と消失、起点と着点の間に非対称性がみられる。中国語は起点と着点の両方を必要とすることから、起点に鈍感で着点に敏感な英語や日本語に対応するのは (20) のみで (21)-(24) では異なるふるまいをする。

英語と日本語もさらに範囲を広げてみると中身が異なる。一般に英語の NP<sub>1</sub> は NP<sub>2</sub> を所有するため [+Animate] の意味素性を付与され、Quirk et al (1985) や Goldberg (1995) も NP<sub>1</sub> を「受領者」(Recipient) と呼んでいる。

(25) a. The shortstop threw a ball to the fence. vs \*The shortstop threw the fence a ball.

b. I sent a book to the library. vs (?\*) I sent the library a book.

二重目的語構文は (25a) では the fence が無生物でボールをつかみ所有できないため不適格であり、(25b) では the library を単に建物や場所とみるならば本を所有できないため不適格となるが、the library を人からなる組織とみるならば所有者として適格と解釈される (Langacker1987:40.51 参照)。

他方、日本語は英語や中国語と違って NP<sub>1</sub> に格フレームの後置詞がついていることもあり、NP<sub>1</sub> に生物だけでなく無生物にも自由に用いられる。(25a, b) に対応する日本語では「フェンスにボールを投げる」ことも「図書館に本を送る」ことも可能である。また日本語には (25) のように二重目的語構文と与格構文の区別がない。この違いは日本語の後置詞に由来するところが大きい。これまで NP<sub>1</sub> は移動の着点とみたが、NP<sub>1</sub> は英語や中国語と違って、NP<sub>2</sub> の単なる移動先でなく、NP<sub>2</sub> が出現する場所にもなりうる。

(26) a. 太郎は 西方に 飛行機を 見た。

b. 太郎は 壁に 絵を 飾った。

c. 太郎は 畑に 種を 蒔いた。

(26) からうかがえるように、日本語の「二重目的語構文」は英語や中国語よりはるかに広範囲に用いられる。その主要な原因は NP<sub>1</sub> についている後置詞「に」にある。これまで日本語の NP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub> を英語や中国語と同じ二重目的語とみなしてきたが、英語や中国語は裸の NP<sub>1</sub>、NP<sub>2</sub> であるのに対して日本語の後置詞「に」は単なる着点だけでなく事態の出現場所をも表すためである。ここで詳述する余裕がないが、自動詞につく「に」にも同じことがいえる。

(27) a. 京都に／で 雨が 降った。vs 京都\*に／で 雨が やんだ。

b. クマが 村に／で 出沒した。vs クマが 村\*に／で 殺された。

事態が生じたり消失する場所の意味では (27a,b) のように「で」が自由に用いられるが、「に」は雨やクマが出現する場所にのみ用いられ、雨がやんだりクマが殺され事物が消失する場所には用いられない。

二重目的語構文を記述する際、Quirk et al (1985) や Goldberg (1995) のように NP<sub>1</sub> を Recipient (受領者) と呼ぶのは、NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> を所有する生物である英語の特徴にすぎない。諸言語間の異同や言語普遍性を考慮する場合、二重目的語構文の意味は対象の移動に伴ない、まず着点・起点が設定され、次に NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> の間に所有や存在が設定され、Recipient (受領者) や Benefactive (受益者) などは個別言語を対象に最後に設定されるべきであろう。

言語化においてどの言語にも例外が出てくる。その例外をどのように説明するかも言語分析に求められる課題である。

(28) a. Give the car a push. (=Push the car.) (Quirk et al. 1985:753)

b. The Tabasco sauce gave the baked beans some flavor.

c. The music lent the party a festive air. (Goldberg 1995:146)

(29) a. I envy him his success.

b. I envy his success.

c. I envy him and his success.

英語は通例 NP<sub>1</sub> に生物を用いるが、(28a-c) では無生物が用いられている。この例外が認められるのは、動詞の give, lend などが軽動詞 (light verb) の場合に限られる。軽動詞は統語的には本動詞としてふるまうが、語彙的意味が弱く重要な意味は後続の名詞が担っているためである。(29) は生物

の NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> を所有しているにしても、envy に移動の意味が欠けており、標準的な二重目的語構文と異なる。Goldberg (1995:132) によると、標準的な構文の圧力からか、最近特に若い人の間では次第に用いられなくなっている。松元 (2008) は (29a) に代わって (29b) が高い頻度で用いられ、(29c) もときにみられるという。envy に類する動詞には forgive, admire, respect などがある。

日本語の例外をみてみよう。

(30) 太郎は 次郎に 本を 借りた [もらった、いただいた]。

(30) の下線部 NP<sub>1</sub> は中国語に似て例外的に起点が付与され、主語が着点となる。しかし取得動詞として起点が付与されるのは (30) のごく限られたものであり、この種の動詞も起点を明示するために下線部を NP<sub>1</sub> の形式に代えて「次郎から」とすることもできる。ここで注意すべきことは、取得動詞として同じふるまいをする (21c) (23c) の中国語に対応する「買う、食べる、盗む、受け(取)る」などが日本語では NP<sub>1</sub> を起点とする取得動詞とすることができないことである。これは一方では日本語の二重目的語構文が英語に似て必ずしも起点を必須としないことの反映であり、他方では (30) の「借りる」などが (21b) (23b) の「買う、食べる」などに比べて意味上起点をより強く必要としているためであろう。

(28)-(30) は英語と日本語の例外であるが、ここでは構文としての形式と意味が互いにせめぎあっており、言語化において今後変わっていく可能性がある。

## 5. 何を語り何を語らないか、何を聞き何を聞かないか

言説における人間の思考過程は、§3 で述べたように、概念のネットワークというよりむしろ言語化されたことばの意味に基づいている。こうした視点に立って始めて本節の表題のような問いを発することができる。ことばの全体像に接近するためには、語られた言説・言語表現のみを対象にしたのでは十分ではない。第1に、ことばで語られるものが実態に合うか否かを絶えず点検することが大事であり、第2に、語られたものだけでなく語られないものを見極める必要がある。

まず第1の点からみてみよう。言説には赤裸々に実態を描いたり、意識的に実態と離れた世界を創造したり、実態と異なる虚偽を語るものなど、多様なものがある。言説分析の主要な目的は、分析対象とする言説の内容と現実との関係を明らかにすることである。例えば (17a, b) は Said の一種の言説分析であり、米国やアラブ世界での議論や言説が真実や正義を反映したものではないと批判している。言説分析には、実態を隠蔽する言説をあげたり、実態の問題点を記述・解決しようとする言説内容を再点検するものなども含まれる。

ここでは言説分析そのものに深入りしないで、語を中心とする言語表現をみてみよう。言語表現は実態のどこに焦点をあてるかにより含意が異なる。例えば father (父)・papa (パパ)・male parent (男親)、日本語の「湯」と英語の hot water などの類語句は同じ実体を表現する限りでは同義であるが、異なる含意をもち、同じ文脈に用いられない場合が多い。その結果、一方では諸言語によって (5b) のように (不) 適格性が異なったり、(19) や §5 の二重目的語構文のように異なる言語形式を用い、他方では (3) (4) や (12) のように現実世界の知識を利用して諸言語で同じデフォルト解釈が成立する。言語表現の中には、虚偽にも似て、実態と必ずしも合致しないものもある。例えば人の名前に限らず呼称には幸せや平穏への夢が込められる場合が多い。荒れた海でも太平洋 (the

Pacific Ocean) となり、本来、死に対する保険 (death insurance) が生命保険 (life insurance) と呼ばれる。このような婉曲語法は戦時において頻用される。これは悲惨な現実を隠蔽したり自己の行動を正当化するためである。侵略を進出、退却を転進といたり、ナチはユダヤ人の大量虐殺を「最終解決」と呼び、広島・長崎に投下された原爆は当時の連合国側の政治指導者の Roosevelt と Churchill にちなんで英語でそれぞれ Little Boy、Fat Man と呼ばれたりした。逆に敵対する相手を蔑称語で呼ぶ。第二次大戦中、日本人は英米人を「鬼畜米英」と呼び、英米人は日本人を Jap とか Nip と呼び、ヴェトナム戦争中、米兵はヴェトナム人を slant (目のつり上がった東洋人) とか gook (べとべとしたきたないもの) と呼んだ (詳しくは Hook 1986 参照)。平時でも選挙では対立候補を誹謗中傷する光景がみられるが、このネガティブ・キャンペーンも戦時の蔑称語と同質のものである。

次に第2の点で、言説において何が語られ、何が語られないかをみてみよう。語られる言語表現と実態との間、語られる言説と語られない事柄の間には、(13c) でみたように、いずれも話し手の意図や主張がかかわり、その背後では (13bii) の価値観や信念体系が関与しており、両者は密接に関係している。語られないものや見聞したくないものには不作為と呼ばれるものがある。人は無意識に、または不注意から事態に気づかなかつたり、手をこまねいて傍観することもあれば、あえて積極的行為に出ないこともある。さらには、為すべきことをしないこともある。いずれも表立った行為が存在しない不作為である。しかしここには行為に出ない意図や意志において大きな違いがある。最後の為すべきことをしない不作為は、価値観や正義にもかかわる。例えば法律上の退去命令を受けて退去しなかったり、乳児に授乳しないことは、義務を怠るものとして不作為の犯罪にもなる。このような「不作為」は意図性が高く、極めて「作為的」なものである。語られるものと実態との乖離や語られないものについてはどのような作為性があるかを見極める必要がある。

作為性との関連で、名づけに夢を託しコマーシャルで商品をほめそやし、その実態や短所を語らないことは、ほとんどの発信者や受信者が暗に承知している。しかし問題は、一般の言説で語られることとその実態との間に、多くの乖離や (非) 意図性が潜んでいることを発信者や受信者がどれほど自覚しているかである。

Foucault (1971) は彼が 1970 年 2 月 コレージュ・ド・フランスの教授就任にあたって L'ordre de discours (言説の秩序) の題で行なった開講講演の記録である。言語表現がコンテキストにより異なるように、言説 (の秩序) も社会や時代によって異なるが、講演の冒頭で次のように述べている。

(31) あらゆる社会において、言説の生産は、いくつかの手続きによって同時に統御され、選択され、組織化され、再配分される。 (中村訳 1972:9)

人はところ構わず何事についても語るができるわけではない。社会によってタブーもあり、何を語るかは社会によって統御される。例えば犯罪者を排除し特定の施設へ隔離するためには、その時代の社会・政治・法・家族・教育などの諸制度が結びついて隔離を促す言説を形成していく。その過程で権力の執行は犯罪学・倫理学などを構築する知によって支えられている。権力は抑圧する側とそれに抵抗する側のいたるところに存在するが、権力とわかるようなあからさまな形ではなく、しばしば知の助けを借りて「あたりまえ」とみなされる規範や制度などを介して行使される。規範や制度などの確立は権力と知の協働の産物であり、すべて言説の中で実現される。規範や制度に矛盾がある場合、個人や社会はその矛盾にどう立ち向かい抵抗するかという問題もある。しかし Foucault の主要な関心は個人や社会の主体性より、むしろ時代や社会によって変化する言説 (の秩序) にあった。例えば狂気・犯罪・性などについて現在われわれがもっている観念や規範が権力や知

によってどのように形成され、それによって制度・政府・個人の間でどのようなシステムが働いているかについて歴史的变化の跡を探っている（詳しくは兎玉（準備中）参照）。

今日われわれは科学技術進歩の恩恵に浴している。家では冷暖房のきいた部屋でテレビ・アニメ・DVDなどを楽しみ、炊事・洗濯・掃除は電気器具に任せ、外へは車で出かけ、街では和・洋・中のレストランを自由に選択でき、24時間営業のコンビニ店や自動販売機も利用でき、人との用事や情報の入手は携帯電話やインターネットですますことができる。これらはすべて20世紀後半に出現普及したもので、われわれは快適な生活にどっぷりつかっている。いったん快適さや利便性を手にすると、その質・効率などでよりよいものを求めていき、その欲望を制御することは困難になる。こうした生活の変化は人と人をつなぐことばがない所で進行している。それだけに快適さ・利便性・効率性への欲望が強くなればなるほど、人と人をつなぐことばが語られなくなり、ことばの力は相対的に弱くなっていく。「人は見た目が9割」（竹内2005参照）とまで、いわれる視覚優位の情報化社会の中であって多様な情報こそ入手できるが、玉石混交の情報を取捨選択し有益な情報のみを駆使できるわけではない。見た目で判断し、自分の関心や都合に合う情報のみを利用していく。ここでは表面的・即物的・効率的なものが判断や行動の基準となり、拝金主義に根ざした市場原理がまかり通る環境を生み出しており、ことばを介して内省・創造する思考力が相対的に低下している。ことばはよりよい人間関係や社会を形成するうえで本来の機能をはたしていない。こうした状況は一方では科学技術の進歩によって助長され、他方では旧来の価値観やイデオロギーが終焉を迎えそれに代わる新しいものが欠如したなかで現出している。社会や隣人・家族の中でも共有される話題や思考基盤がないまま、個人個人が自分の世界に閉じこもっている。その結果、ことばを介しての相互交流や相互理解が乏しいなかで人間関係も希薄になっていく。

視覚優位の情報化社会の中で人は自分の好みや関心に合わせて見るものを選択している。例えばテレビ番組においてもニュース・ドラマ・野球放送などの領域によって視聴率が異なり、同じ領域でもそこに登場する解説者・俳優・選手などによって視聴率が異なる。視聴率は主に視聴者の好みを示すものであり、必ずしも番組内容の優劣を示すものではない。

イラク戦争初期の2004年4月末から5月にかけてイラクにおいて2つの事件がテレビを通して明るみに出た。

(32) a. イラクのアブグレイブ刑務所内での米軍兵士によるイラク人捕虜の虐待・拷問の映像

b. アルカイダによるイラク内でのアメリカ人ニック・バーグ氏の誘拐・殺害の映像

いずれも残忍で目をそらしたくなるような映像であった。(32a)の映像はイラク人にとってアメリカ軍による不当な選挙や無差別市民攻撃と同質のものであり、(32b)の映像はアメリカ人にとってイラクはこんな残忍な殺害が行なわれるほど混乱の中にあり、人権を守るため戦争の必要性を訴えるものであった。(31a)の映像はイラクで、(32b)の映像はアメリカで多く流された（詳しくは兎玉2006:162-163参照）。自分の信念を補強し正当化するために、見る光景も違っていた。

これに似た状況は40年前の事件にもみられる。1968年に在日韓国人の金嬉老は2人の暴力団組員を射殺した後、寸又峡の旅館で宿泊客らを入質に立てこもり、テレビを通じて「日本の朝鮮人差別を告発するために事件を起こした」と訴え、多くの視聴者をくぎづけにした。5日間の籠城後逮捕された時、金嬉老は日本ではライフル魔の凶悪犯として、韓国では人種差別抗議の英雄として迎えられた。ここでも同じ光景が見る人の立場によって違っている。

語りたいたいものだけを語り、見たいものだけを見るという性向は、語られたくないものを語らせず、

見られたくないものを見せないという欲求とも容易に結びつく。イラク戦争開始後治安が悪化したなかでバグダッドに最後まで残っていたカタールの衛星テレビ局アルジャジーラも2004年8月には米政府の意を受けて、イラク政府がイラクの平和と治安を妨げるとしてそのバグダッド支局を強制閉鎖した。その報道管制の下で海外のメディアがその後のイラクで何が起きているか詳しく語られないまま、長い間事態だけは進行している。同じ状況が2009年初頭にガザでも起きた。イスラエルがパレスチナ自治区ガザへ軍事攻撃を加え、わずか20日間で死者は1000人を超え、負傷者は約5000人に達した。国連の停戦呼びかけにもかかわらず戦闘は続き、イスラエルは外国報道陣のガザへの自由な立ち入りを禁じた（『朝日新聞』2009.1.15）。ここでもガザ市民の声は外部へ届いていない。

人は皆、ことばの発信者でもあり受信者でもある。受信者としての人々がそれぞれ自分の世界に閉じこもり、自分の認識枠組みの中でのみことばを受け取り、聞きたくない情報に耳を貸さなくなったとき、特に戦争という究極の状況や、社会的弱者の閉塞状況にある発信者は自分の語りの空しさや孤独を感じる。自分の切羽詰った思いを相手の胸倉を揺さぶってでも伝え届けたいという願いで語っても、その訴えが相手に聞き届けられないとわかったとき、発信者はことばへの信頼を失い、相手へ怒りさえ感じる。怒りは容易に社会全体への怒りに転化し、時に無差別のテロや暴力事件に発展したりする（例えば中東の若者の訴えについては児玉 2008:20、秋葉原殺傷事件については大澤 2008 参照）。背景にいかなる事情があるにしても、(17b) で Said が主張しているように、テロや暴力事件は免罪されるべきではない。問題は人間の交流過程においてことばが本来の機能をはたしていないため矛盾・理不尽・孤独・不安・怒り・暴力などが増幅していることである。

個人が社会とのかかわりを失った歴史は、世界的にもそれほど古いものではない。20世紀前半には2度の世界大戦を経験した。後半には1960年代にアメリカでは大規模な公民権運動が起こり、1960年代後半から1970年代前半にかけては中国で「造反有理」や文化大革命が唱えられ、世界ではベトナム反戦運動や大学紛争が吹き荒れた。個人、特に若者は否応なく直接間接にその運動にかかわり、体制批判や社会の矛盾に目を向けた。時代の波を受けながらも、個人は主体的に時代の権力に抵抗し、社会のあり方にかかわっていた。ところが、特にこの3・40年の間に個人が主体的に社会にかかわることは激減している。今日、戦争・人権侵害・差別・貧困などは昔と変わりなく存在しているが、権力への抵抗や社会への抗議は世界で確実に弱まっている。個人の社会への主体的かかわりそのものが時代の波によって変化し、変化の原因が20世紀末にイデオロギーの終焉とともに始まった視聴覚優位の情報化社会にあるとしたら、個人が自分のカラから抜け出して社会とかかわることは決して容易ではない。個人が社会との主体的かかわりを回復するには、新しい時代に対応した新たな条件を探る必要があろう。

## 6. おわりに：今後の意味分析のあり方

人文社会科学として言語学には記述の明示性・簡潔性・一貫性・予測性などが要請される。しかし最も重要なことは、Langacker (1987:34) も指適しているように、できるだけ多くの言語事実 (factuality) を説明することである。しかしその観点からみた場合、今日の言語学は1つの文または隣接の2・3の文を対象に分析しており、言語活動の全域からほど遠く、言語事実の網羅性を確保しているとはとても言いがたい。今日、言語学が狭い範囲を分析対象とし、言語構造中心主義をとっ

ている背景には次のような主張があると想定される。

- (33) a. 科学として記述の厳正さを重視し、まず客観的に分析しやすい言語の形式を分析する。
- b. 概念を意味と同一視している。
- c. 言語構造の基礎をなす文構造と言語活動において多様な要素が関与している言説構造の間には質的な違いがあり、両者は別物である。

言語学が今日の閉塞状況から脱出するためには、(33a-c)の「信仰」を打破することが肝要である。(33a)との関連で言えば、確かに科学として厳正さや一般性などが要請されるが、その前提にはできるだけ多くの言語事実を対象にすることがある。場合によっては、厳正さや一般性を犠牲にしても、言語事実の網羅性を確保することが重要である。言語事実が今は説明できなくても、将来説明されうるためである。言語学が分析対象を拡大してできるだけ多くの言語事実を記述すべきという警告は早くから Lyons (1968) や Lakoff (1974) などにみられる(詳しくは児玉 2002:109 参照)。しかし言語学のその後の動向は、記述より狭い範囲の説明を優先して厳正な形式主義に満足し、警告と逆の方向に進んできた。

(33b)について考えてみよう。確かに言語化する前の概念のうちほとんどすべての概念が言語化された意味になる。その限りでは概念は意味であるといえる。これまでの意味分析は、§2でみたように、統語論の影響もあり、主として文を最大の分析単位として概念と意味をほぼ同義に用いてきた。しかし例えば長い演説草稿をかくとき、思考過程で中心的役割をはたすのは言語化された意味であり、言語化される前の概念ではない。その思考過程で直感とか第六感のひらめきがあるかもしれないが、そのひらめきもことばを介して語られる。概念と意味の異同を明らかにすることにより、§2、§4でみたように、言語化された意味に埋め込まれている原素概念や複合概念を明らかにすることができる。さらに§5でみたように、語られるものの意味だけでなく、語ることを避けて語られないものの意味を考察することができる。

(33c)はどう考えるべきであろうか。本論は語られるもの・語られないものを含めて、言語表現に埋め込まれている意味(を形成するもの)として(13a-d)を設定した。この意味は§3でみたように文や言説に等しく適用されるものである。言説ではことばを多く用いることで(13a-d)の解釈基準を数多く適用したり、また語られないものや聞きたくないものではその適用が(13bii,c)の信念体系や意図などにまで及び、複雑になるが、(13a-d)個々の基準があいまいになるわけではない。意味解釈において文内・文間・言説の間に基本的な違いはない。

言語への信頼が失われ、言語力が低下したなかでことばに本来の機能をもたせることは決して容易ではない。言語への不信を取り除き、言語の力を回復する方策を探るために、言語を用いざるをえないためである。ことばを費やし、コミュニケーションを重ねれば解決するわけではない。あらがうことが困難な時代の波を含む現実世界や発信者・受信者の関係を、ことばを介して、いかに変えることができるかが重要である。その視点からみても(13a-d)は言語学にとって不可欠の分析対象である。

今後の意味分析は(13a-d)を基準に文から言説に至る言語表現の全域を対象にすべきである。そうすることにより、はじめて言語の本来の機能を対象に、言語活動の全域に接近することができる。

#### 引用文献

Benedict, R. 1946. *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture*. Boston:

- Houghton Mufflin Co. (長谷川松治訳、1967『菊と刀——日本文化の型——』東京：社会思想社)
- Blakemore, L. 2001. 'Discourse and Relevance Theory.' In D.Schiffrin, D.Tannen, and H.E.Hamilton (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 100-118. Oxford:Blackwell.
- Fodor, J.A. 1981. *Representation; Philosophical Essays on Foundations of Cognitive Science*. Brighton: Harvester Press.
- Foucault, M. 1971. *L'ordre de discours*. Paris: Gallimand. (中村雄二郎訳、1972『言語表現の秩序』東京：河出書房)
- Goldberg, R.E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 服部雅史・山崎由美子. 2008. 「対称性と双方向性の認知科学：特集『対称性』の編集にあたって」『認知科学』15.3:315-321 (認知科学会).
- Hook, G.D. 1986. *Language and Politics*. 東京：くろしお出版.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論：ことばに埋め込まれているもの』東京：くろしお出版.
- . 2002. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
- . 2008. 『ことばと論理：このままでいいのか言語分析』東京：開拓社.
- . (準備中). 「意味分析の拡大に向けて」.
- Lakoff, G. 1974. Interview in H.Parret (1974) *Discussing Language*. The Hague: Mouton.
- . 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M.Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to the Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. (Vol.1) *Theoretical Prerequisites*. Standford: Standford University Press.
- . 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsui, T. 1993. 'Bridging Referene and the Notions of "Topic" and "Focus" .' *Lingua* 90:46-68.
- 松元豊子. 2008. 「one and one's NP 構造：動詞 envy との関連性」(英語語法文法学会第 16 回大会口頭発表).
- 中野道雄. 2002. 『動作と行動の意味論——非言語的伝達の研究——』東京：英宝社.
- 大澤真幸 (編). 2008. 『アキハバラ発< 00 年代>への問い』東京：岩波書店.
- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA:MIT Press.
- Said, E. 2001. *War and Propaganda: A Collection of Essays*. (A-Abram Weekly などのウェブ上の掲載記事を編集したもの) (中野真紀子・平野貴記訳、2002『戦争とプロパガンダ』東京：みすず書房)
- Sapir, E. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace and Co.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.
- Sequeiros, X.R. 2002. 'Interlingual Pragmatic Enrichment in Translation.' *Journal of Pragmatics* 34:1069-1089.
- Sperber, D. and D.Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 竹内一郎. 2005. 『人は見た目が 9 割』(新潮新書) 東京：新潮社.
- Tesnière, L. 1959. *Éléments de syntaxe structurale*. Paris: Klincksieck.
- Whorf, B.L. 1956. *Language, Thought,, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf* (ed. by J. B.Carroll). Cambridge, MA: MIT.

(本学名誉教授)